

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

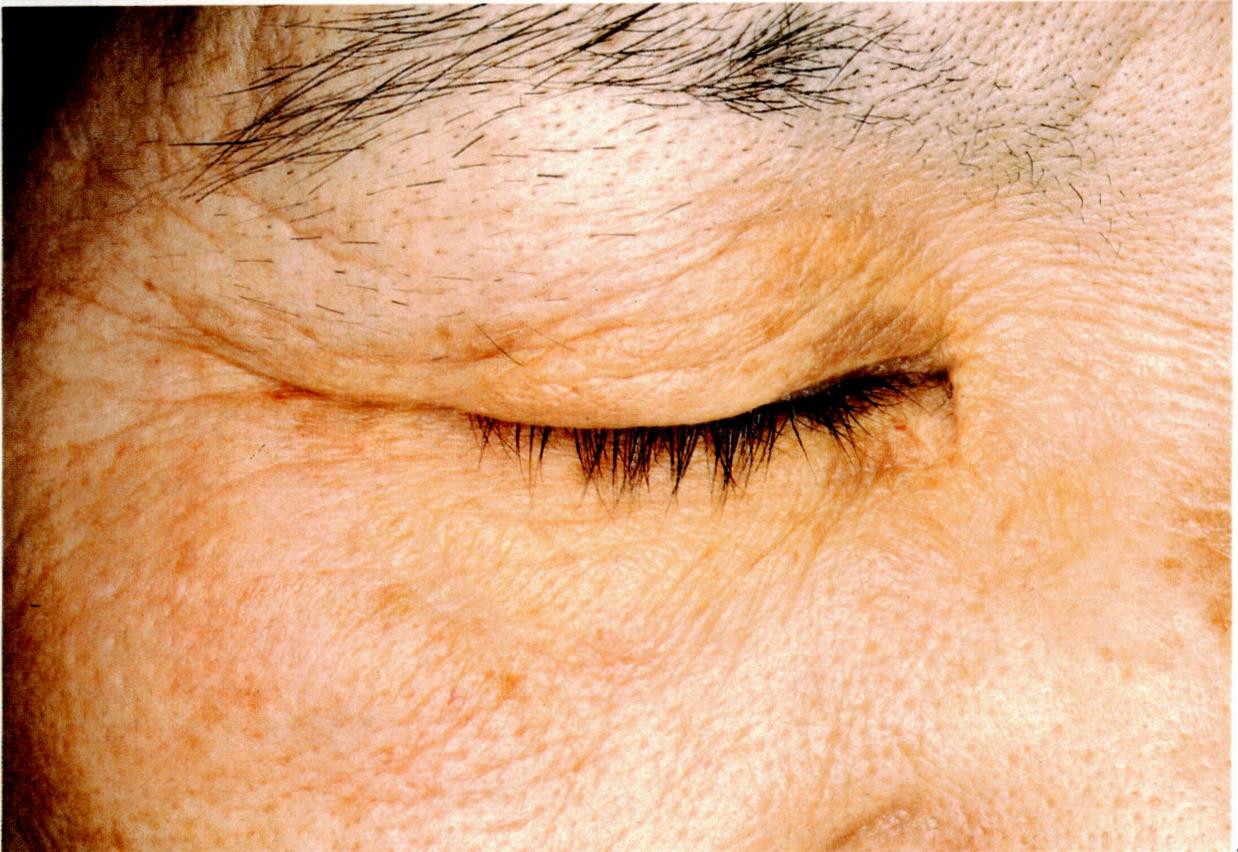
皮膚科の臨床 (1988.05) 30巻5号:505～506.

長期間ステロイド点眼液使用中に生じた眼瞼黄色腫

藤井 理、岸山和敬、松尾 忍



1



2

症例解説

長期間ステロイド点眼液使用中に 生じた眼瞼黄色腫

藤井 理* 岸山和敬* 松尾 忍**

症 例：64歳，女性。
初 診：昭和62年2月24日。
家 族 歴：特記事項なし。
既 往 歴：慢性結膜炎，眼瞼炎。

現 病 歴：両眼の結膜の血管拡張と異物感に対し，18年前から市販のステロイド点眼液（0.5%酢酸コチゾン懸濁液，0.1%磷酸デキサメタゾンナトリウム液）を使用していた。4カ月前から両側の上下眼瞼に自覚症状のない扁平な黄色の皮疹が出現し，徐々に拡大してきたため，北見赤十字病院皮膚科を受診した。

現 症：両側の上下眼瞼全体に皮膚面と同高，ないしはわずかに隆起した境界明瞭な扁平な黄色斑を認める（図1，2）。結膜に黄色斑はない。眼瞼以外の部位に黄色腫を考えさせる皮疹は認められない。また，黄色腫の周囲にステロイド皮膚は認められない。

検査所見：血清脂質は正常範囲内，その他の一般検査成績に異常はない。

病理組織学的所見：右上眼瞼の黄色斑より生検した。表皮は萎縮菲薄化し，真皮上層から中層にかけて泡沫細胞が集簇し，Touton型巨細胞が混在する（図3）。さらに毛細血管の拡張，および軽度の単核細胞の浸潤が認められる。Elastica van Gieson 染色では真皮全体に弾性線維が減少し，繊細化，分離，捲縮などの変性がみられる。

治療および経過：ステロイド点眼液の使用を中止したところ，約1年後わずかに消退傾向が認められた。

考 按

黄色腫の発生要因の一つとして局所的諸因子，特に炎症，外傷，変性などの組織障害と，それに伴う局所の細胞増生が重要視されている¹⁾。これまでに日光過敏性皮膚炎，円板状紅斑性狼瘡，肝斑，菌状息肉症，虫刺部位，種痘や带状疱疹，癩の癬痕部などに出現した黄色腫の報告があり，このような局所障害を受けた皮膚に二次的に発生する黄色腫は dystrophic xanthoma²⁾と呼ばれている。

最近，ステロイドの長期外用後に発生した扁平黄色腫の報告例が散見されるが，森川ら³⁾は，ステロイド皮膚の症状をもつ患者の頬部や外眼角部に生じた扁平黄色腫の症例を報告しており，黄色腫の発生機序にステロイド外用による皮膚萎縮と日光による組織障害の両者が関与していると推論している。

通常，加齢に伴って認められる眼瞼黄色腫は，上下眼瞼の比較的限局した範囲に認められるが，自験例では黄色腫の発生部位が両側上下眼瞼の広範囲に及んでおり，さらに組織学的に黄色腫の発生部位において，ステロイド皮膚に認められるのと同様の弾性線維の減少，繊細化，分離，捲縮などの変化が認められた。

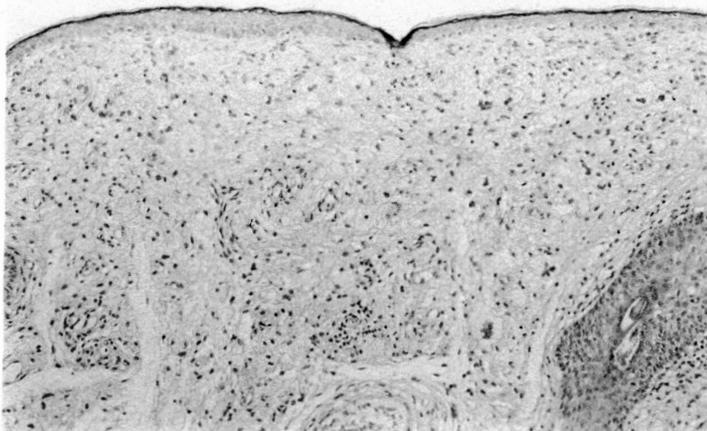
以上から，自験例ではステロイドの点眼が，黄色腫発症に関与する一つの因子，あるいは増悪の因子となった可能性があり，これまで報告されている長期ステロイド外用部に生じた扁平黄色腫と同様のものと考えた。このような症例はこれまで報告をみないが，ステロイド点眼液の長期使用による副作用の一つとして今後留意されるべきであろう。

本症例は日皮学会第280回北海道地方会において報告した。

（昭和63年3月7日受理）

文 献

- 1) 宇野明彦ほか：皮膚臨床，24：345，1982。
- 2) Rosen T：Arch Dermatol，114：102，1978。
- 3) 森川玲子ほか：皮膚臨床，27：891，1985。



3

* Osamu FUJII & Kazutaka KISHIYAMA, 北見赤十字病院，皮膚科（主任：岸山和敬部長）

** Shinobu MATSUO, 旭川医科大学，皮膚科学教室（主任：飯塚 一教授）